

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 9 月 3 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2015

課題番号：25300039

研究課題名(和文) クラスキノ土城を中心とする沿海州渤海土城の考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Study of ancient walled towns of Bohai era in Primorye region

研究代表者

清水 信行 (SHIMIZU, Nobuyuki)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：00178980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,600,000円

研究成果の概要(和文)：1998年以来ほぼ年次的にクラスキノ城をロシア極東研究所と共同で調査してきた。2013年～2016年にかけて本城跡の東門(甕城を持つ)を発掘し、甕城内から検出された瓦敷き道路状遺構の全容を検出し、城内への入り口部分の最終的な幅約4mを確認した。また、入り口部分の城壁本体は、少なくとも2度の改修を経ていることを確認した。この城壁を基底部まで掘り下げたところ、基底部下は水を含んだ泥質層であることも確かめられた。出土遺物では門扉の軸受け金具が検出された。そのため、城門の構造や門扉の錠前について、沿海地方の古代・中世の城跡出土の遺跡・遺物を集成し、それをテーマに青山学院大学で公開講演会を開催した。

研究成果の概要(英文)：From 1998 we were excavating 'Krasキノ ancient walled town' in Primorye region. From 2015 to 2017 we excavated at the eastern gate with a protective compartment called 'Yojo' of this site. We found a pathlike trace paved with flat roof tiles. We unearthed whole of this pavement which was in the 'Yojo' and confirmed the width of the entrance (about 4m) into the walled town. We also confirmed that the part of main wall which was in the 'Yojo' was repaired at least two times. When we unearthed to the basement of this main wall we found peaty soils under the basement. We found many artifacts. There was a remarkable iron good. It was a bearing of door. Therefore we gathered the artifacts of iron keys and locks found from ancient and medieval sites in Primorye. The sites in Primorye area which had remains of gates were gathered too. We held a symposium 'Excavate Bohai!' in Aoyama Gakuin University and published a collection of treatises about them.

研究分野：考古学

キーワード：渤海 古城跡 堡壘 瓦

## 1. 研究開始当初の背景

渤海は唐によって「海東の盛国」と称される(『新唐書』渤海伝)ほどに、9世紀のころには中国東北地方からロシア沿海州、朝鮮半島北部において、大きな勢力を誇るまでに発展していた。

清水らは1992年以来、ロシア科学アカデミー極東支部諸民族歴史学・考古学・民族学研究所(以下、極東研究所と略する)の中世考古学研究グループと協定書を結び、沿海州における渤海遺跡の共同調査を行ってきた。この間、沿海州のスイフン川流域における渤海遺跡の踏査、シニェリニコヴォ山城の発掘調査、クラスキノ土城の発掘調査などの共同研究を通して、この地域における渤海研究に関する大きな成果を上げてきた。我々の共同調査を皮切りに、我々以外の日本の研究者が極東のロシア研究者と共同調査をする機会が増加し、旧石器時代や中世考古学、少数民族研究(民俗学、言語学的研究)などの多岐にわたる学問分野の研究交流が行われるようになり、我々の共同研究がそれらの端緒となったものと自負している。

日本人研究者による渤海研究は1905年の日・口講和条約による満鉄の割譲、遼東半島の租借権獲得以来行われてきた(池内宏『渤海国の建国者について』、稲葉岩吉『満州発達史』、鳥山喜一『渤海史考』など)。1932年の満州帝国の樹立によって、この地域への関心が深まると、1933年、34年の渤海上京龍泉府の発掘を初めとする中国東北地方の渤海遺跡の調査が日本人研究者によって盛んに行われた(東亜考古学会『東京城 渤海上京龍泉府址の発掘調査』)。そのような状況の中で、渤海の五京のうち上京龍泉府、東京龍原府、中京顕徳府の地が何処であるかが比定されるに至った。2度にわたる上京龍泉府の発掘調査では、その第五宮殿跡(戦前の日本の調査時の遺構名)から和同開珎が出土し、日本と渤海の深い関係を示す証拠として注目された。我々が、当初沿海州の渤海遺跡を調査し始めたのは、このような戦前における日本人研究者の大きな成果があったからである。和同開珎が上京において出土するのであれば、遣渤海使が日本から到着し、あるいは日本へここから帰国したと考えられるクラスキノ土城でも日本に由来する遺物の検出が当然期待される。そのような予見のもと、1992年からの日・口共同研究が開始された。6年間の日・口両国の研究者の信頼関係構築期間を経て、1998年にクラスキノ土城の発掘に着手することが出来た。以来、今日に至るまで年次的にクラスキノ土城の調査を行ない、大きな成果を得てきた。本研究はクラスキノ土城の調査が15年目を迎えるのを機に、調査研究の方向性を考え、沿海州の渤海遺跡の性格と機能をさらに詳細に明らかにしようとするものである。

## 2. 研究の目的

研究代表者清水信行は2010年から2012年に科研費の助成を受け、本遺跡の調査を行っている。2013年3月には公開シンポジウム『渤海を掘る』を開催するとともに『クラスキノ土城の性格と機能』と題して論文集を作成する予定である。この土城は『新唐書』に「龍原東南瀕海、日本道也・・・」とある日本と渤海の交流拠点の港にあり、かつ塩州の州治所在地であるとされている。これまでこの土城の東城壁の構造、東門の構造等について調査を行ってきた。現在、東門の発掘調査中であるが、東門の城内側入り口から甕城内、甕城外部へと瓦敷き及び石敷きの道路状遺構を検出し、東門全体の構造を明らかにしつつある。本研究はこの土城の調査を通して、その構造や機能を明らかにし、クラスキノ土城が日渤海交流の拠点であったことを確認すると共に、東アジア地域の中で、沿海州の渤海土城が占める歴史的意義を明かにすることを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究では、土城内に入る東門入口部分(内部入口部分)を以下の理由によって、重点的に調査することにする。

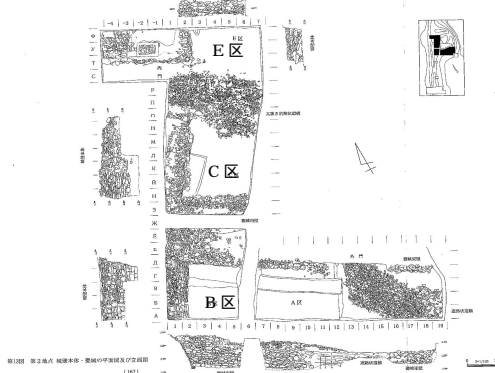
- そこからは他と比べて多量の瓦が出土しており、内部入り口に何らかの瓦葺上屋施設があったと予想される。
- 内部入り口部の通路は瓦敷きになっており、城内へと続く。
- 入口部の城壁本体の北側部分から城壁に登るための階段状遺構を検出している。
- 内部入口の城壁本体南側部分も合わせて調査し、内部入口部分の全体構造を確かめる必要がある。内部入り口部分の他に、瓦敷き道路状遺構は西に向かって城内へと続き、その南北両側には建物遺構が存在したことが予想されるため、城内の東門付近に試掘坑を明け、その存在を確かめる。

また、ロシアから研究者を招請して、発掘成果を発表する公開研究会を開く。最終年度において、ロシア研究者を招き、シンポジウム『渤海を掘る』を開き、本研究の総括とする。

## 4. 研究成果

クラスキノ土城東門甕城内に検出された瓦敷き道路状遺構の全容を明らかにし、その幅を確認した。また、轍と考えられる2条の凹み<sup>註1)</sup>を検出し、その幅が凹みの心々距離で1.1m、東に行くにしたがって幅が広がり1.4mになっていることを確認した(第1図)。この凹みはC・E区内を西から東の方向へと延びており、甕城内門近くでは幅が1.1mで、東に向かうにしたがって徐々に幅が広がっている。この道路状遺構の甕城外門は甕城内

門から見て東南の方向にあり、城外から甕城内に馬車で進入した場合、左方向に向きを変えながら甕城内門を進むことになる。C・E区はこの道路状遺構の東端部はその進路の中間部分にあたり、最も大きくカーブする地点にあるといえる。



第1図 道路状遺構検出図

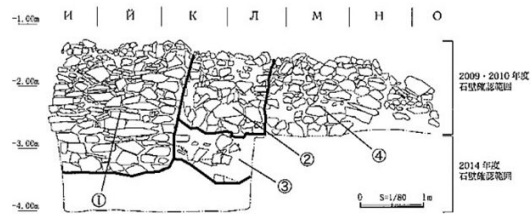
瓦敷き道路状遺構に敷かれた瓦は、ほとんどすべてが平瓦の破片であった。道路面を平らに舗装するため平瓦を用いたと考えられるが、その他に何らかの理由があって、この遺構には平瓦のみが使われたとも考えられる。今後の調査において、この点に注意を向ける必要がある。

C・E区を隔てるベルトを取り除き、道路状遺構の幅が約3m、瓦敷き道路状遺構の幅が約2mであることが確認できた。また、最終段階の甕城内門の幅が約4mであることを確認した。

以上の他にC区甕城内の城壁本体に沿って入れたサブトレンチの調査成果がある。この調査によって城壁本体の基底部下約50cmまで掘り下げることが出来た。-4mのレベルまで掘り下げると炭化物を多量に含んだ泥炭層に近い土が検出され、そこからは白磁、土器片とともに、加工を施した板状木製品が検出された。これらの遺物は、城壁本体が築かれた年代の上限を決定する根拠になりうるものであり、今回の調査の大きな成果と言える。また、この層の上部はしまりの強い褐色土であり、城壁を築く際にこの褐色土で整地した可能性がある。何故なら、板状木製品や白磁片はこの層から出土しており、この層が城壁構築時には露出していたと考えられ、この層の上に直接城壁を築くことは困難であったと思量されるからである。

調査成果のもう一つは、甕城内の城壁本体の構築法についてである。甕城内の城壁本体は4つの構築単位に分けられる(第2図)。

の構築単位は最初に構築された城壁であると考えられるが、このと甕城の外側(B区、甕城南壁の南側)の城壁本体は、その構築材と基底部のレベルが異なり、外見・工法が異なる(第1図)。以上のようなことから、甕城内側と外側の城壁本体の間には設計上の差異、あるいは時期差が存在した可能性がある。



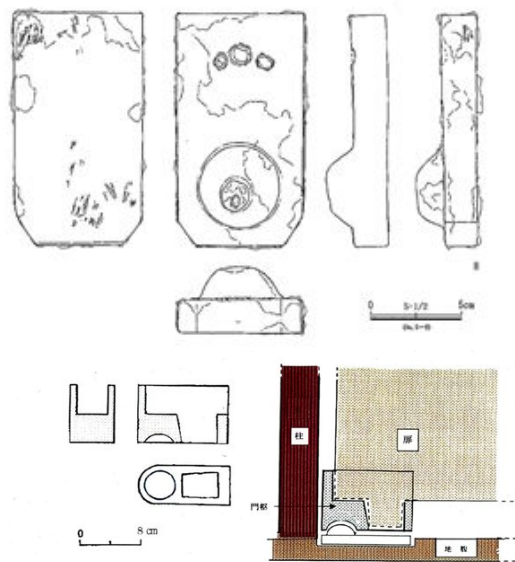
第2図 C区城壁本体の構築単位

この城壁本体の構築法や外見の違いは、この地点だけで見られるものではない。甕城南の『馬面』北側の城壁本体の石材も珪藻質泥岩であるが、その石材の形状は方形のものより長方形のものが多く、外見はB区の城壁本体のそれとはやや趣を異にする<sup>註2)</sup>。城壁本体の構築は、場所によって構築法や石材の形状に差異があるものと考えられる。それぞれの場所において、明確な構築の時期差が確認される場合もあるが、同時期のものでも外見や構築法に差異があるとも考えられる。この点注意を要するところであり、そのことを確認できたことは今回の調査成果と言ってよい。

の構築単位はその石材と積み方がとは異なり、の構築時期よりも遅れて造られたものと考えられる。また、の単位との単位は構築時期が同時か、が遅れた時期のものと考えられる。このことをもう少し具体的に考えると、甕城内の城壁本体は、もともと、の位置までであったが、後のある時点で、の部分にあった城壁本体を解体して、新たにとの部分を築いているということである。その際、の部分をもの基礎部分としてまず築き、その上にを構築したことになる。もし、とに時期差があるとするなら、城壁本体はの位置まで一度築かれ、後にの位置まで城壁を延長し、その後、の上部を修築してを築いたということになる。また、の構築単位は最も遅く築かれたものと考えられる。これは言い換えると、の位置まであった城壁本体をさらに北に伸ばしたということである。そのように考えると、甕城内の城壁本体は少なくとも2度、多い場合は4度の増改築がなされ、そのたびに甕城内門の幅が狭くなっていったと考えられる。

出土遺物の成果について述べることにする。クラスキノ土城で検出された木製品では、木製椀形容器が知られている。2014年の調査で、C区のサブトレンチの城壁基底部から出土した板状木製品は、沿海州の渤海遺跡の出土品の中でも、非常に珍しい遺物である。その用途が何であるかは不明であるが、今後の同じような木製品の出土を期待したい。C14年代の測定を行いたいところである。次に注目されるのは白磁瓶の破片である。口縁部を残しており、釉薬にも特徴がみられることから、生産地の同定が可能であると考えられ、期待される。土器では無頸壺または短頸壺の破片が出土し、その胴部には刻書があり、記

号か文字と考えられる。この資料も珍しく、今後の同様な土器の出土を期待したい。瓦では注目される製作技法の資料が検出された。それは2枚に剥離した平瓦である。その大きさは縦の長さが16cmほどである。粘土紐を桶に巻いたとすれば、このような大きさの剥離がおきることは考えにくい。粘土板桶巻き作りであるとすれば、このような剥離が起こるものと考えられる。渤海の平瓦は粘土紐を桶に巻いて作る例が知られ、これまで粘土板桶巻き作りの確実な例はクラスキノでも見られなかった。筆者は東京大学に所蔵されている渤海上京龍泉府出土の平瓦について拙文を書いたことがあるが、その際、渤海の平瓦に桶巻き作りの例がある可能性を示した<sup>註3)</sup>。上京龍泉府の平瓦には、桶巻き作りの特徴である糸切り痕が残る例がなく、粘土紐を巻き上げた例がほとんどである。それにも拘らず、何故、桶巻き作りがある可能性を示したかという点、渤海の次の王朝である高麗の平瓦は桶巻き作りが多く、糸切り痕が明瞭に残っている。また、渤海の前の王朝である高句麗の平瓦にも桶巻き作りの例があり、その間にくる渤海の平瓦に桶巻き作りの例がない方が不思議であると考えたからである。糸切り痕が見られない理由としては、粘土板を切り取る際に、針金状のものを使ったとすれば、明瞭な糸切り痕は残らない。渤海の遺跡からは鉄製品が多く出土する。糸切りの道具に、針金状のものを使ったと考えても問題はない。



第3図 クラスキノ土城F区出土軸受け金具(上)と上京龍泉府出土軸受け金具(門枢)(下左)及び門扉取り付け概念図(下右)

2015年の調査で、注目すべき鉄製品が検出された(第3図)。それは門扉の軸受け金具と考えられるものである。図3に示したように渤海上京城からは軸受け金具と組み合う

金具が出土している。この金具は「上京郭城北牆正門出土」の、中国では「門枢」と呼ばれる金具である。今回出土した軸受け金具はこの門枢と組み合わせるものである。こちらの門枢はクラスキノでは出土していないが、ロシア隊が調査したクラスキノ城跡北西部の瓦の側壁を持つ地下式竪穴状遺構(清水信行「クラスキノ土城における稀有な遺構 瓦の側壁を持つ地下式竪穴状遺構」『青山考古』第28号2012)からは、錠前の牝金具が出土しており、クラスキノ城跡には門扉を伴う門が多数存在していたことが考えられる。筆者はこれらの門扉の金具がどのように組み合わせられていたかを概念図で示してみた。軸受け金具と組み合わせる「門枢」はかなり複雑な形状をしており、クラスキノ城跡に軸受け金具があるということは門枢もあったと考えたい。そうであるならば、この門枢を製作する工人もいたと考えて良いのではないかと、ということである。技術的に高度である鉄製品を作る工人の存在が想定されるということは、クラスキノ城がやはりそれなりの地位や役割・機能を果たしていたということになる。今後の調査でさらなる成果を期待したい。

註1)『京都府埋蔵文化財情報』第108号「轍から見た長岡京の造営」によると本遺跡からは道路状遺構に幅1.35~1.55mの轍の跡が検出されている。この幅はクラスキノのもの比べてやや広いといえるが、クラスキノのものが轍として狭すぎるとも言えない。

註2)「2002 ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」クラスキノ土城発掘調査団 第7図『青山史学』第21号2003を参照。

註3)「渤海上京龍泉府出土の平瓦・丸瓦」『東アジアの都城と渤海』田村晃一編 財団法人東洋文庫 平成17年 参照

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

清水信行「コラム 沿海州渤海遺跡出土瓦についての一考察」査読無、『古代環東海交流史2 渤海と日本』東北アジア歴史財団編著 2015年7月

清水信行他「2014年度 ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」『青山史学』第33号、査読無、pp147、177~179、2015年3月

〔学会発表〕(計1件)

清水信行、『渤海を掘るXI』、青山学院大学青山キャンパス第16会議室(東京都・渋谷区) 2017年3月18日

〔図書〕(計1件)

清水信行、E.I.ゲルマン、E.V.アスタシェンコワ、岩井 浩人、鎌田 翔、立原 遼平、有

限会社平電子印刷所、『ロシア沿海地方古代・中世城跡の門構造と鍵・錠前』、2017年3月、105ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

清水 信行 (SHIMIZU, Nobuyuki)  
青山学院大学・文学部・教授  
研究者番号：00178980

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

手塚 直樹 (TEDUKA, Naoki)  
青山学院大学・文学部・教授  
研究者番号：80337857

田村 晃一 (TAMURA, Koichi)  
財団法人東洋文庫・研究員  
研究者番号：30082613

小嶋 芳孝 (KOJIMA, Yoshitaka)  
金沢学院大学・文学部・教授  
研究者番号：10410367

### (4) 研究協力者

鈴木 靖民 (SUZUKI, Yasutami)  
酒寄 雅志 (SAKAYORI, Masashi)  
岩井 浩人 (IWAI, Hiroto)  
真鍋 早紀 (MANABE, Saki)  
酒匂 喜洋 (SAKO, Yoshihiro)  
鎌田 翔 (KAMATA, Sho)  
立原 遼平 (TACHIHARA, Ryo-hei)  
E.I. ゲルマン (Evgeniia, GELMAN)  
E.V. アスタシェンコ (Elena, ASTASHENKOVA)  
Y.E. ピスカリエワ (Yana, PISKARIEVA)  
V.I. ボルディン (Vladislav, BOLDIN)  
Yu.G. ニキーチン (Yury, NIKITIN)  
A.L. イヴリエフ (Alexander, IVLIEV)  
N.V. レシチェンコ (Nina, LESHCHENKO)